

美術の窓(19)

李朝絵画について

大和文華館館長 吉川逸治

文華苑の梅のそのがいはやく紅白の花をひらいて春のはじめを告げ、次いでロウバイ、サンシュウ、そしてさくら、すもも、白木蓮、雪柳、藤、つつじ、さつき、萱草とつづいています。石澤前館長の御苦心が偲ばれます。そして、百合のつぼみもふくらみ始め、はやくも日一日と暑くなる季節を迎えています。

まだ若木ですが三春の町から贈られた有名な滝桜(しだれ)の血筋をひいている苗木もすくすくと育っており、やがて文華苑に数多くの枝垂桜がたのしめる時がくるでしょう。数年前本館で催した雪村の展覧会をはるばる見学にこられた三春の町長さん、教育長さん、資料館長さんらが、生き生きとしてバラエティーに富んだ雪村の芸術に、私どもと同様に深い感銘をうけられ、これが奇縁になって三春の町と本館との親しい間柄が生まれました。

三春の町はずれにある晩年の雪村が庵をむすんだあとにある古い御堂を中心に、三春や近辺の方々は勿論ですが多くの高名な美術史学者が全国から集って雪村四百年

祭が行われました。本館から特に貸出した老僧姿の雪村晩年自画像が当日のおまつりの中心になったことは皆様の御想像にかたくないと思います。

さて、この春は四、五月と約一月半にわたって、日本では珍らしい李朝絵画の特別展が本館で行われました。

私ども書生はもう半世紀以前、水墨画専門の先生方の中で、室町水墨画に周文などによって導入された李朝絵画の影響があるか否かがしばしば論ぜられているのをききました。そして、多年日本民芸館などで朝鮮絵画の民芸的なものには接する機会がありましたが、文人を中心とした本格的な朝鮮絵画には親しく接すること無く来しました。

この度の展覧会は李朝文化の精神が豊かにうつし出されるようにとの意図のもとに計画され展観することになりました。そこでは李朝文化の中心、儒教精神の影響が感じられます。李朝絵画の重要な特徴と思われるのは、対象との接触を実に丁寧に取り扱い、風景人物などの写実を格調ある高さに引上

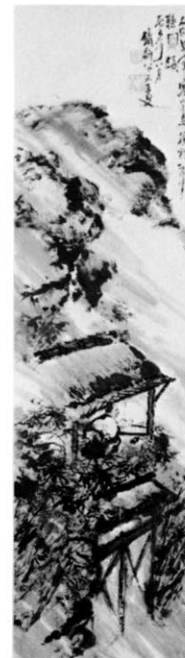
沈師正筆 山水図 李朝後期
酒川子コレクション

げる点にあります。しかも又民芸的な制作でも身近なものの愛着を正直率直に示しています。

一方、同時代の日本絵画に目を向けると、江戸絵画の中心的存在は狩野派でしたから、これからわかれて一家をなす又兵衛・守景・応挙のような個性的大家もいれば、このアカデミズムに反対して芸術の自由、高尚な精神をかかげる文人画も興ってきます。

江戸中期の漢学の隆盛は、教養人のなかに、明・清の文人画を迎える気運を作り、大雅・蕪村・木米・玉堂・竹田など日本文人画家たちが京阪・江戸の中心地のみならず、広く全国の知識人の絵画として、誇らかに学問詩歌の訓練とならんで尊重されました。

文人画は墨の絵画の芸術的資質をば、写実にとられずに、躍動

鉄斎筆 山荘風雨図
当館蔵

する筆線、濃淡の筆痕をもって發揮し、淡彩もしりぞけず、教養ある自我を提示しようというのです。玉堂が心の琴線をば、稀有な墨色、うるおいある筆痕に託せば、大雅は想像豊かな大作を続々と描いて、堂々たる造形力をもって放胆な教養人の心を吐露します。しかも風物を凝視して、的確にその感興を筆先に凝結させ、ことに写生風景には西洋透視図法まで援用して、厳しく觀照を訓練します。

明治の鉄斎は、この伝統を昭和まで続けて健筆をふるい、人びとに西洋近代画の野獸派・表現派の芸術にこれと一脈通じるものがあるのを悟らせます。現に洋画壇のうちに、この自由なる教養人の芸術の伝統をうけつぐ人びとが見いだされるのではないのでしょうか。

季刊 美のたより No.75

昭和61年 5月30日

発行 大和文華館